

【連載：一録音技術者の回顧録 ～アナログからデジタルへ～ 第9回】  
録音プロジェクトでの初期構想と実現できた事柄

日本オーディオ協会諮問委員 穴澤 健明

IX-1. はじめに

前号では、「デジタル録音が社会にインパクトを与えた事柄」と題し、まず世界最初の歌謡曲PCM/デジタル録音での「美空ひばり」について記し、後半では消えてしまった国「東ドイツ」でのデジタル録音について記した。本号では、本連載の終盤に当たってヨーロッパ他でのデジタル録音での初期構想の構築と、そこで実現された事柄について例をあげて説明する。併せて本稿では最近日本で行った例についても説明を加える。

一応の水準の特性を持つ安価な小型録音機材の普及した今、録音での初期構想の構築の重要性は、日に日に増してきている。日本オーディオ協会主催の「学生のための音楽録音コンテスト」でも応募に当たって録音の初期構想の記述を課し、若い人たちにその重要性を理解していただくよう努めてきている。最近になってその成果も表れてきている。

本稿では、まず1976年から1985年にかけて行ったスメタナ弦楽四重奏団のベートーヴェンの弦楽四重奏曲全曲録音での初期構想と実現できた事柄について説明を加える。その次に、このベートーヴェンの弦楽四重奏曲全曲録音プロジェクトが完了しようとしていた1984年から1985年にかけて初期構想を練ったインバル指揮フランクフルト放送交響楽団の演奏によるマーラーの交響曲全曲録音の初期構想と実現できた事柄について記載する。

筆者は1985年に録音現場を去り、その後日本コロムビア株式会社を退社した21世紀に入ると、筆者の所に録音や演奏会の開催に関する相談が飛び込んできた。その中からシュヌアの演奏によるベートーヴェンの初期のピアノソナタの録音、昨年から今年にかけて行った映像音楽タイトル「ベルリンフィルの軌跡」での新しい取り組み、ナタニエル・ローゼンの演奏によるバッハ作曲「無伴奏チェロ組曲」の録音と古民家での演奏会での初期構想と実現例を以下に説明する。

IX-2. スメタナ弦楽四重奏団のベートーヴェンの弦楽四重奏曲全曲録音プロジェクト（1976年～1985年）

今から60年近く前のことである。当時中学生であった筆者は寮を抜け出し、初来日したスメタナ弦楽四重奏団の演奏会を聴く機会を得た。これは筆者にとって運命的な出会いであった。いつか新しい歪の少ない録音機でこの団体のベートーヴェンの弦楽四重奏曲全集を録音したいという夢が中学生の頭の中に芽生えたのである。それから10年強を経た1972年（昭和47年）に、混変調ひずみの少ないPCM/デジタル録音機を開発する機会を得、その最初の録音がこのスメタナ弦楽四重奏団によるモーツアルトの「狩」他の青山での録音であった。そして1975年（昭和50年）にはチェコに機材を運んでの「狩」に続くモーツアルトの弦楽四重奏曲の録音が実現し、ベートーヴェン弦楽四重奏曲全曲録音プロジェクトの機は熟してきていた。

弦楽四重奏と言うのは変わったジャンルである。過去形而上の世界に最も近い音楽ジャンルとされ、その演奏する様は4人の賢明な哲学者たちが意見交換している姿に例えられ、その

演奏には16本の弦を持つ一つの楽器が実現されなければならないとされてきた。演奏する楽団も、曲によって異なるが一流の演奏家4人が何十年もの間毎日毎日3時間以上の練習を重ねる専門の団体があれば、オーケストラのメンバーである一流の演奏家が副業でそれほど練習することなく仲間を集めて楽しそうに弾き名演を行う団体もある。幸いなことに筆者は両者の録音に参加する機会を得ることができた。前者の代表がベートーヴェンの演奏で高い評価を受けるチェコ・フィルハーモニー管弦楽団出身のスメタナ弦楽四重奏団であり、設立後すぐにそのメンバーはオーケストラを退団している。後者の代表がスメタナ弦楽四重奏団と同時期に活躍したプラハ交響楽団のメンバー4人からなるプラハ弦楽四重奏団で、シューベルトやドヴォルザークの作品で多くの名演を残した。

パリ他のヨーロッパの大都会で活躍したボヘミアンと呼ばれた芸術家たちの供給国はチェコであった。チェコは、音楽家特に弦楽奏者を周辺国に多く供給し、メンバーの多くがチェコ人と言うドイツの楽団も少なくない。弦楽四重奏の分野でも然り、いまだに多くの専門の弦楽四重奏団がチェコ内に存在しお互いにしのぎを削っている。

20世紀に現れた弦楽四重奏団の中でも傑出した存在とされるこのスメタナ弦楽四重奏団の演奏によるプラハでのベートーヴェンの弦楽四重奏曲全曲録音プロジェクトは1976年(昭和51年)6月3日に始まった。筆者もこのプロジェクトのはじめから1981年の第11番「セリオソ」まで練習に立ち会うと共に、そのすべての録音にも立ち会う機会を得た。1982年以降は制作と録音をチェコ側に任せ、1985年(昭和60年)に本プロジェクトは完了した。本プロジェクトが始まって10年後のことであった。その4年後にこの団体は解散し活動を停止した。



写真1. チェコの版画家の描いたスメタナ弦楽四重奏団の演奏(筆者所蔵の版画より)

スメタナ弦楽四重奏団によるベートーヴェン弦楽四重奏曲全曲デジタル録音の概要を以下に示す。

10年間（1976年から1976年まで）をかけてブラハで行われた  
スメタナ弦楽四重奏団の演奏によるベートーヴェン弦楽四重奏曲全曲のデジタル録音

曲名	録音年	録音会場
・弦楽四重奏曲 第1番 へ長調 作品18-1	1977年4月	ブラハ・スプラフォン・スタジオ
・弦楽四重奏曲 第2番 ト長調 作品18-2	1976年6月	ブラハ・スプラフォン・スタジオ
・弦楽四重奏曲 第3番 二長調 作品18-3	1978年5月	ブラハ・スプラフォン・スタジオ
・弦楽四重奏曲 第4番 ハ短調 作品18-4	1976年6月	ブラハ・スプラフォン・スタジオ
・弦楽四重奏曲 第5番 イ長調 作品18-5	1976年4月	ブラハ・スプラフォン・スタジオ
・弦楽四重奏曲 第6番 変口長調 作品18-6	1978年5月	ブラハ・スプラフォン・スタジオ
・弦楽四重奏曲 第7番 へ長調 作品59-1	1978年5月	ブラハ・スプラフォン・スタジオ
・弦楽四重奏曲 第8番 ホ短調 作品59-2	1979年10月	ブラハ《芸術家の家》ドヴォルザーク・ホール
・弦楽四重奏曲 第9番 ハ長調 作品59-3	1979年10月	ブラハ《芸術家の家》ドヴォルザーク・ホール
・弦楽四重奏曲 第10番 変ホ長調 作品74	1979年10月	ブラハ《芸術家の家》ドヴォルザーク・ホール
・弦楽四重奏曲 第11番 へ短調 作品95	1981年6月	ブラハ《芸術家の家》ドヴォルザーク・ホール
・弦楽四重奏曲 第12番 変ホ調 作品127	1981年6月	ブラハ《芸術家の家》ドヴォルザーク・ホール
・弦楽四重奏曲 第13番 変口長調 作品130と 大フーガ作品133	1982年6月、9月	ブラハ・スプラフォン・スタジオ
・弦楽四重奏曲 作品14-1の編曲 嬰ハ短調 Hess 34	1982年9月	ブラハ・スプラフォン・スタジオ（注）
・弦楽四重奏曲 第14番 嬰ハ短調 作品131	1984年7月	ブラハ《芸術家の家》ドヴォルザーク・ホール
・弦楽四重奏曲 第15番 イ短調 作品132	1983年12月	ブラハ・スプラフォン・スタジオ
・弦楽四重奏曲 第16番 へ長調 作品135	1985年6月	ブラハ《芸術家の家》ドヴォルザーク・ホール

注：作品14-1は1797年から1798年にかけて作曲されたピアノ曲

IX-2.1. スメタナ弦楽四重奏団のプロジェクトでの初期構想と実現できた事柄

本プロジェクトでは、初期構想として以下に挙げる3点に取り組んだ。その成果も併せて以下に示す。

1) 作品の性格にあった音響条件を持つ複数の録音会場を使うこと。

1976年にこのプロジェクトが始まったときの録音会場は、ブラハの新市街にあるスタジオであった。ここはその実は安ホテルの食堂であり、肉の煮込み料理のにおいに満ちていた。この食堂の響きは作品18の6曲には許容できるが、ロマン派的な要素が加わるベートーヴェンの中期の作品に対しては物足りなかった。この改善のために、筆者はブラハ内の録音に使えるような会場を探したが見つけることは出来なかった。ブラハは第2次大戦での爆撃で破壊されたビルがわずかに小さなビル一つのみという古い街であるため、新しく録音に適した会場を見つけるのは極めて困難であった。当初より最適な録音会場と目をつけていたのはチェコ・フィルハーモニー管弦楽団の本拠地「芸術家の家」ドヴォルザークホールであったが、スケジュール調整が難航した。数年のチェコ側の努力の積み重ねにより、初期構想が実現し1979年、1981年、1984年、1985年にはこの会場を録音に使うことができた。作家ロマン・ローランが傑作の森と評したベートーヴェンの弦楽四重奏曲第8番、第9番、第10番、第11番と言った中期の傑作でその成果を示すことができた。

## 2) 途中であきらめることなく本プロジェクトを完結させること。

プロジェクトを開始した時の演奏者の年齢は、最も若いメンバーで48歳、最長老は56歳であった。演奏者の健康状態の維持はプロジェクトを完結する上での最優先事項であり、録音時の演奏者の負担を避けるためこちらからプラハに押しかけることとした。それでも、体調が悪くなることもあり4人すべての健康維持は容易ではなかった。プロジェクトが始まって4年目の1980年には、メンバーの一人がとうとう手術のため長期間入院し、録音ができなかった。この年になって日本側も危機感を持ち、日本ツアー時の録音の可能性を現地にいた筆者に打診してきた。楽団側は断ってきたが、理由をたどると我々が頼りにするプロデューサーのいないところでの録音は考えられないというのがその理由であった。そこでメンバーが最も信頼するプロデューサーのヘルツォーク博士にご出馬願うこととした。彼が参加しての日本での録音は、ベートーヴェンであれば将来のためにすべてを必ずキープし、ベートーヴェン以外はライブ録音タイトルとして販売することを目的として制作した。

幸いにして本プロジェクトが完結したためキープしたベートーヴェンの録音を使用する場面はなかった

## 3) 本プロジェクト期間中に機器他の改善に取り組みデジタル録音のノウハウを確立すること。

1976年のプロジェクト開始時点では、13ビットの録音機を使用していたが、プリエンファシスを併用していたため等価14.5ビットのダイナミックレンジを得ていた。

その直後の1977年からは14ビットの録音機を導入し、ここでもプリエンファシスを併用したため等価15.5ビットのダイナミックレンジを得ていた。CD導入の5年も前でありながらCDに近いダイナミックレンジがすでに得られていたのである。そしてドヴォルザークホールでのより大きなダイナミックレンジを必要とする中期の弦楽四重奏曲の録音を行った1979年には16ビットの録音機を導入しプリエンファシスの併用により、通常のCDを越える等価17.5ビットのダイナミックレンジを得ていた。

演奏家の健康状態を重視したこともあり、筆者のこのプロジェクト期間中のプラハでのスケジュールは、比較的余裕があった。第2次大戦前のアール・ヌーヴォー時代に建てられた巨大な机を備えた大きな客室を持つ古いホテルに滞在し、次に使う録音機の設計開発に取り組んだ。机は製図に便利で電話も雑音も入らないことから、ここで開発した回路基板のすべてが修正なく動作したと記憶している。CD時代に備えての録音側の改善作業が機材も含めこの期間にほぼ達成されたのである。

## IX-3. インバル指揮フランクフルト放送交響楽団の演奏によるマーラーの交響曲全曲録音プロジェクト

1984年春、フランクフルトのヘッセン放送局に関係者が集まって、インバル指揮のフランクフルト放送交響楽団の演奏によるマーラーの交響曲全曲録音プロジェクトの打ち合わせが始まった。

アルテ・オーパーは、もともとオペラハウスとして建てられたが、戦災に会い戦後はオペラハウスとしては大きすぎることからコンサートホールとして再建された。このホールは、容積が大きいことからお客の入った時と入らない時との響きや音質の差が少ないという特色を持っていた。また、この会場でのインバルのマーラーの交響曲全曲公演は、数年前にも行われ、練習が充分に行われていたこと、その上でこの公演の前にも再度練習が行われたこと、大変人気があったため



公演そのものも複数回行われたこと、など様々な条件に恵まれていた。以上の好条件により、実況録音でありながら通常無理と考えられる編集も可能な状況を整えることができた。これにより録音作品の品質向上を図り、商品化を行う上での基本的なリスクを回避することができた。

### IX-3.1. マラー交響曲全曲録音プロジェクトでの初期構想と実現できた事柄

#### 1) アルテ・オーパーの音を把握するため、基本に戻って最適マイク設置位置を探すこと。

録音の開始9ヶ月前の1984年の初夏からアルテ・オーパーのトーンマイスターにフランクフルト放送交響楽団の公演があるたびにマイクの設置位置を変えて録音し日本に送ってもらった。その録音を聴きつつ最適なマイクの設置場所を探し、併せて録音手法の検討を行った。

#### 2) 新しい時代のオーケストラ録音のあるべき姿を求めること。

検討した結果、ワンポイント+補助マイク方式録音を行うことで一致した。マイクについては、筆者の師匠であるピーター・ヴィルモースにもプロジェクトに加わってもらい、彼の母国デンマークのB&K社のマイクロフォンを積極的かつ本格的に活用することを考えた。

その上でワンポイント+補助マイク方式の録音でありながら、あわよくば曲によってはインバルの承認を得て、音質に有害なコムフィルタ歪の無いワンポイント録音分のみの楽曲の販売も行えればとの構想も持っていた。このため4チャンネルの16ビット録音機の第1チャンネルと第2チャンネルにワンポイント分の信号を記録し、第3チャンネルと第4チャンネルに補助マイク分を記録した。



写真 1. 巨大なアルテ・オーパーの内部

1985年2月に始まったインバル指揮フランクフルト放送交響楽団の演奏によるマーラー交響曲全集の録音の概要を以下に示す。

インバル指揮フランクフルト放送交響楽団の演奏による  
マーラー作曲交響曲全集の録音

曲名	録音年	録音会場
・交響曲第1番 二短調《巨人》	1985年2月28日／3月1日	フランクフルト・アルテ・オーバー
・交響曲第2番 ハ短調《復活》	1985年3月28／29日	フランクフルト・アルテ・オーバー
・交響曲第3番 二短調	1985年4月18／19日	フランクフルト・アルテ・オーバー
・交響曲第4番 ト長調	1985年10月10／11日	フランクフルト・アルテ・オーバー
・交響曲第5番 嬰ハ短調	1985年4月18／19日	フランクフルト・アルテ・オーバー
・交響曲第6番 イ短調《悲劇的》	1986年4月24／25日	フランクフルト・アルテ・オーバー
・交響曲第7番 ホ短調《夜の歌》	1986年5月14／17日	フランクフルト・アルテ・オーバー
・交響曲第8番 変ホ長調《千人の交響曲》	1986年10月14／17日	フランクフルト・アルテ・オーバー
・交響曲第9番 二長調アダージョ～第10番嬰ヘ長調	1986年9月24／26／27日	フランクフルト・アルテ・オーバー

ここで筆者は録音現場から引退し、筆者の出番は終わりとなった。その後の作業はヴィルモースとDENON ドイツの西村龍雄、久木崎秀樹、高橋幸夫他の各氏に託した。

この後この録音は、1987年に第2回文化庁芸術作品賞を受賞し、1988年にはフランスの第1回ディアパゾン・ドール賞を受賞し、同じ1988年にはドイツレコード大賞を受賞した。特に交響曲第4番については1986年の昭和61年度レコードアカデミー賞録音部門賞を受賞した。この交響曲第4番は編成が小さいこともあり、補助マイク部分を排除したワンポイント録音作品としての発売がインバルによって最初に許諾された。この受賞に関連しレコード芸術1987年1月号に、映画評論家の故荻昌弘氏が「ディスクのミューズのほほえみ～録音部門受賞作品を聴いて～」と題する感動的な文章を寄稿しておられる。以下にその文章の一部を引用させていただく。

「私は今年の録音部門賞にインバル指揮フランクフルト放送交響楽団のマーラー『第四交響曲（デンオン）』が選ばれたことを、得心以上の同感で、賛成し、祝福する。（途中略）日本人のテクニクと感性が、デンオンのデジタル録音機でとらえた音楽だった。録音の一原型であるシンプルな美学を、今考えうる極限の装置と技術と耳で世界へ突きつけたのは私たちの国だった。（以後略）」

#### IX-4. シュニャアの演奏によるベートーヴェン・ピアノソナタの録音

筆者が1985年に録音現場を去ったが、日本コロムビア株式会社を退社した21世紀にもなると、筆者の所に録音や演奏会の開催に関する相談が飛び込んできた。その中から国内のピアノ教育団体の依頼で行った初期ベートーヴェン・ピアノソナタの録音を以下に取り上げてみよう。

##### IX-4.1. シュニャアの演奏によるベートーヴェン・ピアノソナタの録音での初期構想と実現例、

###### 1) 児島新氏校訂の楽譜を使用した演奏と録音

ドイツのボンにあるベートーヴェン研究所の研究者であった児島新氏は長年ベートーヴェンのピアノソナタの研究を行ない、1985年に氏の校訂した楽譜の初版が春秋社より発行され、1998年にその新装版が復刊された。この楽譜で運指（指使いの表記）を担当したのは児島新氏

の古くからの友人フリードリッヒ・ヴィルヘルム・シュヌアであった。ハンス・リヒター  
ハーザーの高弟であったシュヌアは、ドイツの名門デッドモルト音楽院の学長を務める一方、  
日本での感動的な公開レッスンにより我が国のピアノ教育界でも高い評価を得ていた。

このプロジェクトの基本構想は、春秋社版の楽譜でシュヌアの演奏する CD を実現することに  
あった。録音は当時 DENON ドイツのメンバーでデットモルト音楽院出身のトーンマイスター  
であるゲルハルト・ベッツ君にお願いした。

このプロジェクトの当初の目標であった  
ベートーヴェンのピアノソナタ全曲は、  
児島新氏の逝去により初期ピアノソナ  
タ集のみで終わり、残念ながら実現できな  
かった。

この CD では、小学生や中学生の弾く聴  
きなれたベートーヴェンの初期のピアノ  
ソナタと同じ曲でありながら、全く異なる  
次元の演奏が実現され、ピアノ教育団体、  
音楽鑑賞団体の双方から高い評価を得る  
ことができた。



写真 2. 春秋社版の楽譜によるシュヌアの演奏する  
ベートーヴェン初期ピアノソナタ集のジャケット

この CD の概要を以下に示す。

児島新校訂、フリードリッヒ・ヴィルヘルム・シュヌアの運指による  
春秋社版の楽譜を用いたシュヌアの演奏による  
初期のベートーヴェン・ピアノソナタのデジタル録音

録音日：1999年6月7日～11日

録音場所：Festburgkirche, Frankfurt, Germany

録音技師：Gerhard Betz (DENON Germany)

CD番号：DENON GES-12720～1 (2002年発売)

- |                         |      |     |        |
|-------------------------|------|-----|--------|
| ・ ピアノソナタ第 1番 (児島校訂・春秋社版 | 第1番) | へ短調 | 作品2-1  |
| ・ ピアノソナタ第 2番 (児島校訂・春秋社版 | 第2番) | イ長調 | 作品2-2  |
| ・ ピアノソナタ第 3番 (児島校訂・春秋社版 | 第3番) | ハ長調 | 作品2-3  |
| ・ ピアノソナタ第19番 (児島校訂・春秋社版 | 第4番) | ト短調 | 作品49-1 |
| ・ ピアノソナタ第20番 (児島校訂・春秋社版 | 第5番) | ト長調 | 作品49-2 |
| ・ ピアノソナタ第 5番 (児島校訂・春秋社版 | 第7番) | ハ短調 | 作品10-1 |
| ・ ピアノソナタ第 6番 (児島校訂・春秋社版 | 第8番) | へ長調 | 作品10-2 |
| ・ ピアノソナタ第 7番 (児島校訂・春秋社版 | 第9番) | 二長調 | 作品10-3 |

## IX-5. 映像音楽タイトル「ベルリンフィルの軌跡」で行った取り組みについて

50タイトル64時間分の映像音楽コンテンツからなる「ベルリンフィルの軌跡」でその一部の領域をお借りし、数年前に日本オーディオ協会賞を受賞した残響分離制御技術を生かした音楽サンプルを記録し、新しい音楽再生のあり方の検討を昨年から今年にかけて行っている。

## IX-5.1. 初期構想と反応例

ベルリンフィル他が演奏するカルメンの「闘牛士の歌」に残響分離制御処理を加え、以下の6種類の映像付きサンプルを作成し、通常のコンテンツに追加した。

- 1) オリジナルの2チャンネル
- 2) 5.1チャンネルサラウンド
- 3) 客席前方の音
- 4) 客席後方の音
- 5) パソコンや小形ステレオに適した音
- 6) ヘッドフォンで聴くための音

現在このサンプルに対する評価を行っているが、結論を出すまでにはまだ至っていない。

日本オーディオ協会会員各位にもこのコンテンツをご活用いただき、サンプルの評価と共に、今後の音楽再生のあり方を検討する上での参考にしていただければと思っている。

このサンプルの作成時に用いた自作の残響分離制御ユニットの外観を写真3示す。このユニットの入力に通常のステレオ音声を加えると実時間で出力に上記6種の音が得られる。



写真3. サンプルの制作に用いた残響分離制御ユニットの外観

この評価サンプルを含むコンテンツは、株式会社ジェー・ピーの発売するJPIV-0005「ベルリンフィルの軌跡」(50タイトル、64時間分の映像音声コンテンツの記録されたリムーバブル・ハードディスクとそのプレーヤ)で鑑賞することができる。



IX-6. ローゼンの演奏する無伴奏チェロ組曲のCD録音支援と古民家での演奏会の企画

音楽演奏活動を行うかたわら録音活動も行っている松本和人、杉本伸陽両氏の実施したナタニエル・ローゼンのバッハ作曲「無伴奏チェロ組曲」の録音を手伝う機会を得た。

その一方で西国分寺の古民家での演奏会を企画し実施する機会を本年になって得た。

IX-6.1. バッハ作曲「無伴奏チェロ組曲」の録音と古民家での演奏会の初期構想と成果

1) バッハの無伴奏チェロ組曲の録音と言うと残響の豊かな録音が多いが、バルトークの子息のピーター・バルトークの行ったシュタルケルの演奏によるコダーイの無伴奏チェロ・ソナタの録音のように、残響の少ないオンな録音があっても良いのではないかと筆者はかねてより思っていた。山中湖のフィンランドから輸入した木造住宅で演奏し録音したこのCDは、オンな音でありながら魅力があり好評をいただいている。現在販売されているCDにはスピーカーで聴くための録音が記録されているが、他にヘッドフォンで聴くのに適した録音も制作してあるので今後の展開が楽しみである。

2) 聴衆の心を打つ演奏会の企画とその初期構想例

感動を与える演奏会となると多くの条件が満足されなければならない。本年6月12日に約80名の熱心な聴衆を得て西国分寺の古民家で筆者が発起人となり演奏会を開催した。この演奏会で実現しようとした条件(A~E)と実現された事柄を( )内に示す。

- A. 素晴らしい演奏家(チャイコフスキーコンクールにも優勝したローゼンの演奏)
- B. 素晴らしい作品(巨匠バッハの定番曲)
- C. 素晴らしい楽器(弦楽器製作者飯田裕氏が特別にローゼンのために制作した楽器)
- D. 素晴らしい響きを持つ会場(富士山麓より移築した伝承300年の古民家の美しい響き)
- E. 素晴らしい聴衆(過去十年もこの場所での演奏会に参加してきた第1級の聴衆)

このAからEまでの5拍子揃った演奏会の反応は素晴らしく、多くの人に感動を与えることができた。演奏会においても録音と同様に初期構想が重要であることが明確になった。



写真4. ナサニエル・ローゼンの演奏するバッハ：無伴奏チェロ組曲全曲のCD2枚組(DENON COCQ 85291-2)と本年6月12日の古民家での演奏会のチラシ

## IX-7. おわり

本稿では、ヨーロッパ他でのデジタル録音での初期構想構築と、そこで実現された事柄について例あげて説明した。今後より優れた初期構想を持って感銘を与えるプロジェクトが出現することを切に望んでいる。

次号では、本回顧録の最終回として、最近行っている検討及び実験の結果を報告すると共に、これまでの回顧録でいただいた質問にこたえさせていただく。

本稿執筆中に、ドレスデンのゼンパー・オペラの復興記念公演、フランクフルトでのマーラーの交響曲全集の録音等の様々なプロジェクトで、ご協力をいただいたドイツ在住の西村龍雄氏の訃報に接した。心から西村氏のご冥福をお祈りする次第である。

## 参考資料

- ・ CD DENON COCQ-84721～8 ベートーヴェン弦楽四重奏曲全集 スメタナ弦楽四重奏団
- ・ CD DENON COCO-73123 マーラー交響曲第4番 エリアフ・インバル指揮  
フランクフルト放送交響楽団 ヘレン・ドナート（ソプラノ）
- ・ CD DENON GES-12720～1 シュニャア／ベートーヴェン 初期ピアノソナタ集
- ・ 株式会社ジェー・ピーの発売する JPIV-0005「ベルリンフィルの軌跡」（64 時間分の映像音声コンテンツが記録されたリムーバブル・ハードディスクとそのプレーヤ）で鑑賞可能。
- ・ CD DENON COCQ-85291～2 ナサニエル・ローゼン／バッハ 無伴奏チェロ組曲 全曲